

聖書：ルカ 23：50～56

説教題：葬られたイエス

日時：2013年3月17日

イエス様の葬りが記される箇所です。ここにヨセフという人が出て来ます。彼はアリマタヤというユダヤ人の町出身の人で、この福音書には初めて登場します。イエス様が息を引き取られた後、そのなきがらを世話したのは、12弟子たちではありませんでした。彼らの多くは蜘蛛の子を散らすように逃げ去ってしまい、誰がイエス様のみからだの世話をするのかと思っていると、これまで一度もその名が紹介されなかったこの人が前に出て来ます。誰も予想しなかったこのヨセフという人が、決然と立ち上がって、誰もいなくなった舞台にただ一人やって来たのです。

50節に「議員のひとりで」とあります。彼はユダヤの最高議会サンヘドリンのメンバーでした。サンヘドリンと言えば、イエス様に不当な有罪判決を下し、イエス様を十字架につけた張本人たちです。しかし51節に「この人は議員たちの計画や行動には同意しなかった」とあります。イエス様が十字架につけられた日早朝のサンヘドリンの判決は、全会一致で決まったように見えますが、ヨセフは急遽その日に開かれた議会には欠席していた、あるいは彼には招集がかからなかった、ということなのかもしれません。あるいはヨセフは賛成しなかったけれども、そんな意見など相手にもされないほどの勢いで議会は強行採決したということかもしれません。

その彼について50～51節には「りっぱな、正しい人で、神の国を待ち望んでいた」ともあります。しかしそんな彼にも弱さがありました。ヨハネの福音書19章38節：「イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していたアリマタヤのヨセフが・・・」。つまりヨセフは、自分がキリストへの信仰を持っていることを公にはして来なかったのです。そのため彼はしばしば「隠れキリシタン」の代表のように言われたりもします。ところがそんな彼が、この時に自分の信仰を明らかにして、誰もいなくなった舞台に一人でやって来たのです。なぜでしょう。それはやはりイエス様の十字架のお姿を最後まで見届けたことと関係していると思います。

イエス様の十字架上の姿は、それを正しく見る者の心を動かさずにいないものでした。一緒に十字架につけられた犯罪人の一人も、イエス様の姿を見て、そのきよさと麗しさに打たれ、信仰に入りました。百人隊長もすべてを見届けた時、「ほんとうに、この人は正しい方であった」と言いました。群衆も、最初とは打って変わって、胸をたたきながらその場をあとにしました。同じようにアリマタヤのヨセフも、十字架上の主の姿を見て、それまでとは違った行動を取るように導かれたのでしょう。

マルコの福音書を見ると、ヨセフは「思い切ってピラトのところに行き」と記されています。彼はこのことに伴う多くの犠牲を覚悟しなくてはなりません。まず経済的な犠牲を覚悟しなくてはなりません。彼はこの後、自分の墓を提供します。これは彼が自分のために新調した墓だったと思われまふ。その他にも様々な費用もかかるでしょう。また社会的な評判や地位を失うことも覚悟しなくてはなりません。十字架刑につけられた犯罪人と、一体誰が自分を関係づけたいでしょうか。そんなことをしたら、おまえもあの仲間か、と周りから見られることになります。ペテロも「おまえはあの人の仲間だろう」と問われて、それを打ち消さざるを得ないほど社会的プレッシャーの中にもありました。イエスの葬りの世話をかって出ること、私はこのキリストの弟子です！私はこのキリストを愛しています！と全世界に向かって公言することです。また彼はキャリアを失うことも覚悟しなくてはなりません。もうサンヘドリンのメンバーとしてはやって行けないかもしれません。自分の思い描いていた一生を歩めないかもしれません。しかしヨセフは思い切ってピラトのところへ行きました。それは、これらのものすべてを失うことを惜しいとは思わないほどに、今やイエス様と真実な関係に生きることをより大切なことと彼が考えたからでしょう。マタイ 16 章 25 節：「人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら何の得がありません。」　そうして彼は自分が今なすべきこと、自分に与えられている富をもってできることを精一杯行なおう、と導かれたのです。

ヨセフのこの献身は、後に見るように豊かに報われることになります。彼が提供したデラックスマな墓によって、イエス様の死のおぞましさが、死の直後から和らげられ始めています。栄光へと向かう神のみわざが、彼の墓を用いる仕方できつそくここに始まっています。そしてこのヨセフの墓から、三日後に主のよみがえりが起こります。彼の墓は主が復活された墓として非常な光栄を受けることとなり、彼のしたことは4福音書のいずれもが書き留めているように、永遠に記念されることとなるのです。

さてヨセフはピラトの許可を経て、イエス様のみからだを十字架から取り降ろします。それは現実にはどんなに筆舌に尽くしがたい作業だったのでしょうか。イエス様のからだを降ろするためには、御手と御足に打ち込まれた釘をねじり取らなければなりません。そのこと一つを想像してみただけでも、どんなに大きな悲しみを伴う作業だったかと思ひます。また無造作に釘を引き抜くこともできません。ヨセフが目の前にしていたのは、もはや自分の力では何もできない、無抵抗でなすがままのなきがらです。優しく扱わなければ、どのようにからだの重みで崩れ、ひどい状態に至るか分からない遺体です。あのいのちに満ちた方が、こんな変わり果てた姿になってしまった！ということをもヨセフは、改めて自分の手と体全体とで感じずにいなかったに違ひない。心に留めて良いと思われることは、イエス様はこのようにして再び、信仰者の胸に抱かれたということです。イエス様は生まれて間もなく、エルサレム神殿でシメオンとアンナに抱かれました。そして地上の最後にも、こうして神の国を待ち望む信仰者によって、そ

の胸に抱かれました。しかしこの時は最初とは変わり果てた死体の状態において、です。ヨセフは、身動き一つせず、息もせず、瞳孔の開いて動かないイエス様の体を、このようにして抱きました。それは十字架上の御苦しみを遠くから眺めるよりも、もっとつらいことだったでしょう。しかし私たちが今日の箇所を通して見なければならぬのは、これが私たちの救い主の姿であるということです。このイエス様こそ、神様が私たちに与えて下さった最高のプレゼントなのです。クリスマスの時に生まれたイエス様を抱くだけでなく、私たちはここまで歩んで下さったイエス様を自分の胸に抱かなければならぬ。神はこのことを私たちのためになして下さったのです。

ヨセフと共に女たちもこの現実を良く見た人たちでした。彼女たちはガリラヤから来た人たちで、どうしたら良いものか、ただ悲しみに暮れて動けないでいましたが、そこへヨセフという人が現われ、イエス様の葬りの世話をしてくれました。女たちはそのヨセフについて行って、墓と、イエス様のからだの収められる様子を良く見たのです。この時もイエス様は香料と共に亜麻布に巻かれたことが他の福音書に記されていますが、女たちはイエス様への愛から、さらに十分なことをして差し上げたいという願いを持ったのでしょう。彼女たちは戻って来て、香料と香油を用意します。次の日は安息日のため、休まなければなりませんでしたが、週の初めの日には再び墓に行ってその世話をできるようにと準備をしたのです。

以上、今日の箇所を通して私たちがヨセフや女たちとともにしっかり見つめるべきは、イエス様は実にここまで来て下さったということです。永遠の昔から神と共におられた一人子の神が、この世に来て下さった受肉も驚くべき出来事です。しかしイエス様は、そのはるか先まで進んで下さいました。ナザレの村における身分の卑しい生活、また公の生涯に入り、悪魔の誘惑にあわれたこと、人々の反抗とあなどり、迫害、ゲッセマネの園における苦悩、サンヘドリンとピラトの前における有罪判決、そして十字架上の苦しみ、……。そしてイエス様は何と墓の中に葬られることにまで進んで下さった。墓とは本来、絶望の場所です。そこに入り、入り口の戸を閉められたら、それで終わりです。生きているこちら側とは隔絶された世界で、その先がどうなっているのか考えることができない、また考えたくない闇の世界です。

しかし私たちはこのイエス様の葬りの記事をその通りに受け止める時に、ただならぬ慰めを受けることができます。なぜならイエス様はこの地上に来て、私たちと同じ生を歩んで下さったばかりでなく、私たちと同じ墓にまでも下って下さったからです。私たちは地上で生きている時ばかりではなく、墓の中においても決して一人ぼっちではない。そこもイエス様が行って下さった場所であり、共にいてくださるところなのです。しかもイエス様はただ単に墓の中に一緒に行って下さっただけではありません。ヘブル書2章14節に、「死によって、死の力を持つ者を滅ぼし」とあります。イエス様は私たちのための身代わりの死によって、死が私たちに対して持つ力を粉碎して下さいました。イエス様はそのようにしてご自身の死をもって、死を滅ぼすために、墓にまで赴いて下さったのです。そしてそこから死臭を取り去り、

そこをいのちの香りが満ちるところへそしてくださった。そしてさらにその墓はよみがえりが起こる場所となります。普通、墓は人生の終着駅と思われています。そこに入ったら、もう終わり。しかしそこは新しいいのちが始まる場所になる。最後に行き着く場所と言うより、先にあるさらに素晴らしい祝福を待望する場所となる。墓は神が備えてくださった天の祝福に入るための門、あるいは入口のようなものとさえなったのです。

私たち一人一人もみなやがて死にます。そして墓に入ります。しかし私たちが今日の箇所から思うべきは、イエス様も墓に入ってくださいました！ということです。またイエス様はただ入ってくださいただけではなく、そこに勝利をもたらし、いのちの香りの満ちる所としてくださいました。さらによみがえりの出来事へとつながる通路、門としてくださいました。私たちはこの望みをしっかり抱くことによって、地上の人生を恐れずに、喜びをもって生きるように導かれます。そして墓に入る時も、いよいよ永遠の命へのドアを開けるところまで導かれたことを感謝して、主が導いてくださるさらなるいのちの祝福へ、主を賛美しながら進んで行くことができます。